

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

スパイ・ゾルゲ

配給/東宝

2003 (平成15) 年6月15日鑑賞

Data

監督・原作・脚本：篠田正浩

出演：イアン・グレン／本木雅弘／

椎名桔平／上川隆也／永澤

俊矢／葉月里緒菜／小雪／

夏川結衣

👁️👁️ みどころ

1945年8月15日の敗戦を、14歳の時に迎えた軍国少年であった篠田正浩監督が、戦争を通じて、日本とは？日本人とは？を問う最後の作品。今でも真相は明らかになっていない複雑なゾルゲ事件とゾルゲへの協力者尾崎秀実の人間像を、1930年代の日中戦争と日米開戦に至る激動の時代の中で見事に描き出している。年配の観客が多いが、是非若い人たちに観てもらって、「あの時代」を語る格好の素材として欲しい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<篠田正浩監督と戦争体験>

篠田正浩監督は、1931年生まれ。1945年8月15日の日本敗戦の日を迎えたのは14歳の時だった。当時の篠田少年は「軍国少年」。「天皇陛下のために死ぬ」と教えられていた。

しかし、その日を境に、世の中の価値観は180度転換し、民主主義に移行した。そのとまどいを篠田少年は今日に至るまでずっと胸に抱き、自分自身の戦争体験と1945年8月15日の敗戦を通して、日本と日本人を考え、描き続けてきた。

1997年の『瀬戸内ムーンライト・セレナーデ』は、篠田監督の日本人観を端的に表現した作品で、私の大好きな作品だ。

<篠田監督とゾルゲ事件>

篠田監督が、ゾルゲ事件を新聞で見て衝撃を受けたのは、1942年、彼が11歳の時だったとのこと。そして、1984年以降、ゾルゲ事件の映画化を構想し、2001年3月「スパイ・ゾルゲ製作委員会」の設立以降、その製作が本格化し、篠田監督最後の作品

として執念を燃やして完成させたものだ。従って、この映画は監督として指揮しただけではなく、原作、脚本も篠田正浩が自ら書いている。

<映画で描かれるスパイ・ゾルゲとゾルゲ事件の真相>

この映画は、ゾルゲの協力者であった朝日新聞記者、尾崎秀実（本木雅樹）の逮捕の場面から始まる。そして続いてゾルゲも逮捕。

ゾルゲはソ連のスパイで、日本の極秘情報をソ連に流しており、尾崎はその協力者だった。そして、2人とも共産主義者（共産主義者）だったということだ。

2人は取調べの中で、驚くべき事実を自白していく。そこには、1930年代の上海を舞台とした諜報活動を始めとして、激動の時代の中での重要な情報がいっぱい・・・

ゾルゲ諜報団のスパイ活動によって得られた情報は、当然のことながら日中戦争、独ソ戦、そして日米開戦に至るあの時代の動きとピッタリ一致している。

ゾルゲは死刑執行の直前、「これは私の最後の言葉だ」として、「国際共産主義運動万歳！」と叫んだと言われており、この映画でもそのように描かれている。

また、一般には、「日本はソ連に侵攻しない」というゾルゲがソ連に送った情報によって、スターリンは軍隊を西に移動させ、ドイツとの戦いに戦力を集中できたため勝利した、と言われている。しかし、それらが本当の真実かどうかは、実は現在もよく分かっていないとのことだ。

他方、尾崎秀実なる人物が共産主義者であったかという点、そうではないはずだ。彼は、朝日新聞の記者として、中国問題に精通していく中で、軍国主義の道をまっしぐらに進む日本の行く末に不安を持ち、何とかこれを押しとどめようとした知識人だ。もちろん、彼はゾルゲに情報を流すことがどのような意味を持つのかについてはわかっていたはずだが、それを自分の責任と判断において実行していた、当時の数少ない勇気ある日本人（知識人）だったはずだ。

これらについては、あらためていろいろ勉強しなければ、容易にその評価はできないだろう。

<複雑な歴史の動きの描き方は難しい>

ゾルゲは1914年にドイツ志願兵として第1次世界大戦に参加したが、戦場で負傷した。そして1918年のドイツ敗戦後、ドイツがどん底状態から、どのように立ち直るのかをゾルゲは当事者として見てきた。ヒトラーを批判するのはたやすいものの、第1次世界大戦の敗北で疲弊しきったドイツを短期間で立て直すについて、ヒトラーが果たした功績は否定することができない。

他方、1931年9月18日、奉天（現在の瀋陽）郊外で柳条湖事件が勃発し、1932年には満州国が建国された。日中関係はその後緊張関係を増し、1932年第1次上海

事変、1937年第2次上海事変が起こり、本格的な日中戦争に突入していった。

また、1933年には日本は国際連盟を脱退し、1936年には2・26事件が発生した。1937年近衛文麿内閣が成立したが、1940年には、日独伊三国同盟を締結し、そして遂に、1941年12月8日の真珠湾攻撃により日米開戦に至った。

このような激動の歴史の流れの中で乱れ飛ぶ情報を尾崎秀実とゾルゲは丹念に追い、分析した。そして、ゾルゲはこれを重要情報としてソ連に通報した。

こんな複雑な歴史の動きをスクリーン上で追っていくのは大変だ。

そして、こういう問題に興味を持ち、豊富な知識を既に持っている観客にとっては、次から次へと現われる歴史上の事実は、ある意味でうっとうしいし、断片的な情報提供にすぎない。

しかし、他方、こんな歴史上の動きを知らない人たちにとっては、こう次々といろいろな出来事を見せられてもなかなか分からないだろう。

とにかく、これだけの歴史的事実や時代の流れをすべて観客に理解させることはすごく難しいことだどつくづく実感させられた。

<多彩な登場人物と効果的な音楽>

主役は、ゾルゲを演じるイアン・グレンと尾崎秀実を演じる本木雅弘。この2人の演技は実にすばらしい。また取調官に扮する椎名桔平、上川隆也そして妻や愛人を演ずる葉月里緒菜、小雪、夏川結衣の女優陣もいい。他方、尾崎秀実と接触する異色の人物、宮城与徳を演ずるのが永澤俊矢。宮城は沖縄生まれで絵画の勉強のために渡米し、アメリカ共産党に入党し、その活動のために尾崎秀実と接触するという役割だ。尾崎秀実が共産員だと言われたのも、この宮城との接触によるものだ。

各画面で使われる音楽も効果的。メインで使われるのは、池辺晋一郎氏作曲の交響曲とのことだが、日本国旗とナチスの卍旗の2つが掲げられた日本料亭の宴席での三味線によるドイツ民謡の「菩提樹」は面白い。また、敗戦後の東京で歌われる「東京ブギウギ」や「リンゴの唄」は、精巧なCGグラフィックによる画面の中、結構臨場感がある。面白いのは、東西ベルリンの壁が崩壊し、レーニン像が倒される中で流されるギターだけによる「インターナショナル」。これは実に美しい。

<画面に流れる最初の言葉と最後の言葉>

この作品は篠田監督の最後の作品だから、彼の思い入れが強い。そのため、画面の終わりにはスクリーン上に「想像してごらん、この世に国家なんか存在しないと。決して難しいことではない、殺戮も死もなくなり、宗教の争いも消えてしまう。想像してくれよ、すべての人間が平和に暮らしている姿を。君はこんな私を夢想家と思うだろうが」という言葉が流れる。これはジョン・レノンの『イマジン』の歌詞で、篠田監督がどうしてもこの

「想像してごらん、この世に国家なんか存在しないと」の言葉を伝えたかったとのこと。

また、最初に流れるのは、魯迅の「思うに希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないともいえない」という言葉。これらを見れば、確かに、篠田監督の思い入れが伝わってくるような気がする。

また、ラストのラストに「この作品を武満徹に」という言葉が流れる。これは、篠田監督は、日本を代表する現代音楽の作曲家である武満徹氏に映画を教えられたから、とのことだが、そこまでの気持ちを観客に分かってもらおうというのはちょっとムリでは・・・。

<面白い観客層>

座席はほぼ満席だが、最近観た映画の中では例外中の例外で、観客のほとんどは年配の人だ。明らかに私より年上の方が半分以上。若者のアベック連れはほとんどいない。

帰り道、しゃべっている声も、「今時の若者は、こんな映画観てもわからんやろなあ・・・」というもの。確かにそうだろう。しかし、それでは、何のために篠田監督が長年構想を練り、精根をこめて、この映画を製作したのか分からない。

若い人たちにこそ、この映画を観てもらい、あの激動の時代、戦争の時代を考え、そして日本敗戦の意味あいを考えてもらわなければならない。

これと対照的なのが、同時期に公開されている『マトリックス・リローデッド』。これは若いアベック客が列をなして並んで待っている状態。オジサン族はまず1人もいない。この『マトリックス・リローデッド』を観に来ている若い人たちを、全部『スパイ・ゾルゲ』の観客に振り向けるにはどうすればいいのだろうか・・・

2003（平成15）年6月16日記